テーマ『タイ国民が国王に求める姿』

問題関心『元々タイのＧＭＭＴＶの俳優のファンで、その俳優さんたちはどんな文化や環境で生活しているのか興味があったから。タイのドラマやタイの俳優のＳＮＳを見て、日本と違う文化があると気づき、さらに『タイ』という国に興味を持ち、ゼミで調べてみたいと思ったから。2 年生で国王について調査したときに日本の天皇とは違い、国民たちは父と親しんでいたことに驚き、深く調査したいと考えたから。』

結論『本稿は、前タイ国王の事例から国民が求める国王のあるべき姿を考察した。プーミポン前国王は国の父として讃えられているが、タイ農村部では歓迎されていないことは意外な点であった。しかしながら不敬罪を恐れるタイ国民は、そういった違和感を口に出すことが出来ないため、前国王が国の父との評価に変わりはなく、この評価がタイ国内でもいまだに国王のあるべきモデルケースになった。
王即位当初は彼の認知度が低かった。しかし国王の行幸や国王に関する映画制作
とその上映を行うことで、国民へ十分な宣伝効果をもたらした。これらの活動は、現在の国王や王室の認知度を上げたと言える。また、クーデターによる国王によってのクーデターの沈静化は国民や政党政治に一定程度の影響力を行使としたと言える。他方で、国王任せになってしまったタイ政治の脆弱さも同時に露呈した。
ワチラーロンコーン国王は、前国王のように行幸を行っても、これまでの奇行の事実や国民の失望がぬぐえるわけではない。
失った信頼を取り戻し、王室の権威を維持するためには、これまでの前例にこだわらない王室改革プロジェクトに力を入れるしか手立てはない。例えば、タイ地方に積極的に王室との協力を打診して全国的に信頼を回復していく、または王位継承権を女性にも広げ、より優秀で国民から信頼される王室出身者をトップに据えるといった多角的な改革が必要であると考える。』